

吐蕃王国訳経史

原田 覧

新興の宗教、或は外来の宗教が一民族に受容され、定着するに至る経緯は、宗教そのものの持つ力と共に、その民族の政治、経済、社会的な背景を総合的に考究せぬ限り、その真相に迫る事はできない。仏教が吐蕃王国に伝来し、受容され、定着した経緯について、その様に総合的に迫るべき条件は、現在の所まだ十分に備わってはない。

漢文資料、敦煌資料、金石資料などと共に、後代のチベットの学僧達が仏教信仰の立場から著わした仏教史書類などが、従来からの主要な研究材料であり、とりわけ『ベシヨー』*rBa bzhied* の伝える諸伝承が貴重な研究対象とされている。しかし『ベシヨー』そのもの

資料批判も、まだ十分になされていとは言い難いのが現状である。従つてここでは、史実と認定すべき論証を経た伝承を基礎として、吐蕃王国と仏教の関係を、特に訳経史を中心として概観してみたい。

一、仏教伝来と仏寺の建立

チベットの伝承によれば、ヘトセニヤツヨン *Ha tho do snya ra drisan* 王（六世紀²⁹）のもとに、黄金の小塔と共に『宝篋經』（『北京版』三〇巻、七八五番）などの經典が天降ったという。しかし同王代に仏教が伝來したとする伝承は、觀音の加護によって粟迦族の王孫が吐蕃王国

を建てたとする建国神話と同様に、仏教を權威づける為に後代に作られた伝承と認められる。

同王から五代後のソンツォンガムポ Strong btsan sgam po HI (ハ八一〇—六四九)、正式にはティソンツォン bhoṭa が創制した伝承の遺名は別にして、史実として認められてくる。しかし辺境調伏の諸寺、あるいは再調伏の諸寺を建立したり、インドや中国などから学僧を招き、仏典の翻訳を行った等の諸伝承は、史実とすべき論拠がない。ただ同王代に既にチベット文字が使用されていた事は、それをトーンミ=サンボータ Thon mi Saṁboṭa が創制した伝承の遺名は別にして、史実として認められてくる。

カルチュン sKar cung 碑文の記載によると、ティソンツォン HI、テイドウーハン Khri 'dus strong HI (六七一〇年)、トイデックツヒン Khri lde gtsug brtsan HI (七〇〇年—七〇四年)、ティソンツォン HI、Khri strong lde brtsan HI (七〇〇—七〇七年)、ヤシドティソンツォン HI

Khri lde strong brtsan HI (七七六—八一五)自身の代に寺院を建立したとする。従つて本格的に仏教を導入したティソンツォン王以前にも、仏寺の建立が実施された事がわかる。特にティデックツォン王は金城公主（一七三九）を妃に迎えており、同公主は唐朝の文物を導入する事に努めた様であるが、その詳細は必ずしも明らかにはされていない。

二、仏教の正式導入

ティソンツォン王は、一一〇歳になった七六一年に正式に仏教を導入する決意をした。この事は、同王が布告した二種の崇仏詔勅の内の由来詔勅に、その旨が示されている。ヤシドの仏教導入に重要な役割を果たしたのがバ tBa/sBa/Ba'/'Ba's/Bas/dBas 出であつ、ベ=ティシク Khri gzigs ベ=セルナノ gSal snang (一七九七) の両者である。

ティシクはベ=ティシル [ギ] Khri bzher [gyi bul]=トイシク=サンシ Sang shi=ムナ Ratna である。出家名はペルヤン dPal dbyangs である。彼は幼い

ティソンツォン王のお相手役の一人ギヤトウク=カルケン rGya phrug Gar mkhan ハ、恐らく同一人物であり、七五四年前に入唐し、同年以降に帰藏し、また六七年にも再び入唐している。最初に入唐したティシクは、唐帝から『十善經』などの經典を賜わり、後にティソンツォン王の求めに応じて、それ等の經典を示して、同王を仏道に導いたと伝承されている。

セルナンは出家名がイエシヒーラカハボ Yeshe dbang po ハある。セルナンはネペールに趣き、シャーンタラクシタ Śāntarakṣita のあとで発心を果たすと共に、彼をチベットに招いたと伝承されている。

さてシャーンタラクシタは七七五年にサムイヨー bSam yas 寺の定礎を行い、本堂の完成した七七九年の正月八日には「試みの六人」sad mi drug の出家の戒師となり、同十七日には前述の王の崇仏詔勅が布告される。また同じ正月、或はそれに先立つてティシク等がシャーンタラクシタについて梵語の學習を開始しており、インドから説一切有部マガダ派毘婆沙師の一比丘を招いてくる。また七八一年には求めに応じて良琇と文素が

入藏しており、中国語や中国仏教の學習も開始されたと推定され、七八七年にはサムイヨー寺の全体が完成していく。沙州敦煌の陥落した七八六／七年には、北宗禪を承け西明寺大徳(?)であった摩訶衍禪師が入藏し、彼はサムイヨー寺で自宗を宣揚し、その隆盛に対して印度系仏教徒の反発が強まり、七九四年頃インドからカマラシーラ Kamalaśīla (一七九七) が招かれ、彼はサムイヨー寺で摩訶衍禪師を論破して、インド仏教の正統性を確立する事に努めたのである。

III、仏典藏訳の開始

ティデックツォン王代に幾らかの仏典が藏訳されたとする伝承があり、特にブッダグプタ Buddhagupta の論著が将来され藏訳されたとする。しかし将来者とされるチベット人の學僧(?)の中には、明らかに九世紀中に活躍したと認められる者が含まれており、さりに彼の論著の藏訳者は、現存の藏經本による限り、全て九世紀中に活躍した者達である。従つてこの伝承も史実と認めるわけにはいかない。また八一四年に編纂された『[1]卷

本』翻訳（『北京版』一四四卷、五八三三番）前序は、チイソングチョン王代の翻訳仮典の訂正のみを課題としているのや、同王代以前の仮典翻訳は殆ど無かつたか、仮にあつたとしても極く僅か、或は同王代に既に改訂されてしまつていたとすべきである。

吐蕃王国とネバール、或は中国との接触は古くティン・シ・ヒン王の時代にまで遡りうるので、当然それらの時代から梵語や漢語を習得した通訳者が吐蕃国内にいたとされ、諸文献の藏訳が行わたたとする伝承も幾種か伝えられており、それを史実として論証する論拠の報告も幾つかなされている。シャーンタラクシタのもとで発心を果たし、彼をチベットに招いたセルナンや、入藏したシャーンタラクシタの通訳を務めたと伝承される「カチヒ＝ケサンキア＝タムセ」アーナンタ [Kha che skyes bzang gi bu Bram ze] Ā nanta 等は既に梵語をある程度習得してゐたであらう。唐帝から賜つた漢訳經典『ムンヘトインハトシ』王を仮道に導いたと伝承されるトイシックも、既に漢語をある程度習得してゐたとす

サク lCe Khyi 'brug' ドーナンタの六名であり、一名を除いた他は既に闇説したことのある者達である。彼等の内ペイローチヤナ（『北京版』一四四卷、五八四〇—一番）とトイシック、即ちペルヤン（同、五八三九番）の著作とされる資料

が現存の大藏經の中に収載されている。しかしそれ等の著作の内容と用語を検討する限り、孰れも『語合』の編纂によつて確定した新〔欽〕定語 skad gsar bcad に従つた記載表現であり、九世紀以降の改作、或は偽作の資料であると認められる。

チイソングチョン王代の資料として利用しうるものは、幾つかの金石資料と、同王の崇仏詔勅であり、特に崇仏詔勅には多數の仮典用語が用いられている。しかしその仮典用語の中には新定語に一致するものもある為、それが訛語がまだ確定していない混乱を示すのか、或は資料そのものに後代の手が入つてゐるか、などが明確でない。またペイローチヤナやリンチヨンチヨク等の翻訳とされる諸資料が、現存の大藏經中に幾点か収載されているが、それ等も殆ど、明らかに新定語に統一して

くもやあらう。事実トイソングチョン王の崇仏詔勅の中には、多数の仮典の用語が使用されている。従つて七七年以前に既に仮典の学習と共に、その藏訳もある程度行われていたとしても、不都合はないであらう。

さて七七九年、或はそれに先立つてシャーンタラクシ

タから梵語を習得した者達として、シャーキヤア＝ハバ Shā kya pra bha' バイローチヤナ Bai ro tsa na' ティシク、ニヤサン Nya bzang' ハハレハ Khong leb が挙げられ、ニヤサンの代りにセルナンを挙げる伝承もある。一方「試みの六人」には後代の作意が加わつて混乱しているが、最も原型を保つてゐると思められる伝承によれば、トイシック、セルナン、バイローチヤナ、ゲルワ チョクヤハ rGyal ba mchog dbyangs' リンチヨンチ m ク Rin chen mchog' ゲルワチャハチヨア rGyal ba byang chub エタが出家したとわね、前三者が梵語習得者と重複してゐる。また『語合』前序が示すトイソングチョン王代の翻訳師は、シャーンタラクシタを別格とすれば、セルナン、ニヤサン、トイシック、ジュニヤーナ「ドーベヨーニヤ Dsnyā na de ba ko sha' ハハ＝ギト

翻訳されており、彼等の活躍時期を八世紀最後の四半期に限定するならば、翻訳師の名を誤つて付したか、偽つて付したか、或は後代の改訂を受けて殆ど原型を保存していないとすべきである。

さて残るは敦煌藏文資料の一群であり、その中には現代に未伝であった仮典や、伝来資料との対照研究を必要とする仮典、全く異訛の仮典などが含まれてゐる。その様な異訛仮典のうち、カマラシーラの敦煌本『修習次第〔初譯〕』（Stein tibétain (St.) No. 648, Pelliot tibétain (Pt.) No. 682, 825）は、七九四年頃に起つたサムイヒーの崇謹と相前後して吐蕃中央で梵文藏訳された資料であると推定されてゐる。同譯の藏經本（『北京版』一〇一卷、五三一〇番）は、九世紀に掛けてイヒンハーハー Ye shes sde が新定語に従つて藏訳したものであり、敦煌本の成立時期と場所を大きく動かすべき論拠は、今のところ何もない。敦煌本『修習次第』と殆ど同系統の訛語を使用するのに、敦煌本『解深密經』(St. No. 194) があり、藏經本（『北京版』二九卷、七七四番）との詳細な対照によると、敦煌本『修習次第』でも使用されていない古い訛

語も見出される為、或はこの經典の方がより早い時期に梵文藏訳された可能性がある。また敦煌本『宝雲經』(St. No. 161—2)と、同『無尽意菩薩經』(St. No. 48)も同系統の訳語を使用している。前者が、『語合』前序の言う、ティソンデーション王の御前で翻訳し決定した『宝雲經』と同一資料であるならば、サムイエーの宗論の經訳を確認する為に七九四年頃に梵文藏訳されたものとも推定される。さらに訳文全体の調子が敦煌本『修習次第』より新定語に近いので、同資料の藏訳を宗論時に限定しうるならば、敦煌本『修習次第』の成立を七九四年以前とする論拠となる可能性もある。後者は前者と訳文の調子が殆ど同一であるが、關係代名詞の藏訳法が一定している為、或は前者より後の梵文藏訳の可能性がある。

敦煌本『修習次第』と同系統の訳語を使用する他の敦煌文資料に、漢文藏訳『楞伽師資記』(St. No. 710)と同『頓悟真宗要決』(Pt. No. 116)がある。両資料は北宗禪系の禪籍であり、同じ北宗禪を承ける摩訶衍禪師の入藏と関連づけて考える事も不可能ではなかろう。両資料

の藏訳事情は全く推定の域を出ないが、吐蕃中央で漢文藏訳されたのであれば勿論であるが、敦煌近辺で藏訳されたのであっても、藏訳當時に吐蕃中央で使用されていた訳語を利用して漢文藏訳がなされたとすべきである。当然、吐蕃中央での翻訳技術の発展が敦煌などに伝わり、そこで漢文藏訳技術に反映される迄には、ある程度の時間差が考慮されねばならないにしても、沙州敦煌が七八六／七年に陥落して以降に両資料が藏訳されたのであれば、その訳語が敦煌本『修習次第』に近似している事は、両資料の藏訳が同じく七九四年前後になされたと推定する根拠ともなりうる。また同じ漢文藏訳『法王經』(『北京版』三六巻、九〇九番)と同『金剛三昧經』(同三二巻、八〇三番)と同系統の敦煌本があり、それらも禅宗系の偽經とされており、その訳語は前記の両資料に類似している為、両資料の藏訳から余り隔たらない後に漢文藏訳されたとすべきであるが、九世紀初頭である可能性も十分残されている。

四、『語合』の編纂

ティデソンツェン王代(七九八—八〇三—八一五)の初期に破仏状態があったと伝承されており、八〇三年の国王の正式登位の後に発布された崇仏署名詔勅と、その要文を刻んだカルチュン碑文が現代に伝えられてくる。一方八〇四年にはナムパルミトクペ Nam par mi rtog pa 等が入唐している。八一四年に至って、ティソンデション王代の梵文藏訳仏典の混乱と誤訳の弊害が指摘され、ティデソンツェン王がその解決を命じたのを受けた、インドとチベットの学僧の協力によって『語合』が編纂された。『語合』は梵語の藏訳語を決定する論拠を四百余語に渡って示した解説語彙集であり、藏訳語が『翻訳名義』大集(『北京版』一四四巻、五八三三番)に殆ど一致しているので、この八一四年を以って新定語制定の開始として不都合はないであろう。即ち一般に『大集』記載の藏訳語を新定語と呼び慣わしており、新定語の正式な制定を『大集』成立時期まで遅らせる事もできるが、藏訳語の決定方針は『語合』によつて確立していだと認められるからである。また『大集』の成立も同じ八年、或はそれ以前であったとする見解もあるが、

『語合』文中には『大集』新定語と異なる訳語も用いられてゐる事と、後に闡説するその他の吐蕃訳經史の諸事情から、『大集』の成立は『語合』に一〇年前後は遅れるべくである。

『語合』編纂に当つて長老格であったチベット学僧は、ラトナラクシタ Ratna rakshita ムダルマターシーラ Dharmma tā shila の二人であり、両者は藏經本『宝雲經』の藏訳者であると共に、彼等の藏訳仏典には新定語以前の訳語が僅かに用いられているので、その藏訳時期は八一四年以前であつたと認められ、それ等の藏訳仏典が新定語によつて改訂されることなく現存藏經中に収載されているのは、同じく殆ど新定語に一致した訳語を用いていたからであろう。

同じく編纂に参加し、恐らく実務の中心となつたであろう翻訳師として、イエシューイデ、ジャヤラクシタ Dsa ya rakṣita' ャンジュショリーベルマ Manydsu shri varmma' ハーネンドラシーラ Ratnendra shi la の名が挙げられてゐる。イエシューイデの藏訳仏典の奥書には、「新定語によつても訳正し」という記述を持つもの

が多數ある。素直に読むならば、以前イエショーデが翻訳したものを、彼自身が八一四年以降に新定語で訂正しと解しうるであらう。またこの種の記述を持たない彼の藏訳仏典は、当然八一四年以降の藏訳仏典と、可能性としては八一四年以前に藏訳したものでも殆ど新定語に従つてゐるのはそのまま改訂を加えなかつたとすれば、それ等の藏訳仏典との両種であることにならう。彼の藏訳仏典数は吐蕃隨一であり、当然それ等の藏訳は當時の翻訳組織が総力をあげて実行し、その長であった彼のみが翻訳師として奥書中に名を残したとすべきである。それは、他の三翻訳師達の翻訳点数が極端に少ない事からも推定されうる。孰れにしても八一四年前後以降が彼の活躍時期の中心であり、彼の活躍が一段落した時点で、その集大成として『大集』が成立したと推定される。また他の三翻訳師達についても、その記載順が當時の序列を忠実に示してゐると認められるので、イエシハーデに続く彼等の活躍時期は、同じくティックデツェル Khri gtsug lde brtsan H (八〇六一八四一) の治世 (八一五—八四一) の前半期の内にあつたとすべきである。

八〇四年に入唐したナムパルミトクバの漢文藏訳仏典が数点現存しており、それ等の訳語例はラトナラクシタ等のものに近似している。従つてその藏訳時期も平行していると共に、その場所も恐らく吐蕃中央であつたらうと想像される。一方、既に閑説した藏經本『法王經』なども敦煌近辺で漢文藏訳されたものであるならば、藏訳技術の発展が伝達される時間差を考慮すると、或はこの時期のものであるかもしない。また敦煌で発見された藏訳の禪籍断簡、特に南宗系のものは、その訳語例からみて、全て九世紀前半以降のものと見られる。さらに摩訶衍禪師の藏訳『頤悟大乘正理決』題問部 (Pt. No. 823, 827, 829) も、この時期の漢文藏訳とすべきであり、北宗系の資料についても個々に検討を加えねばならない。ただこれ等の藏訳を、まだ九世紀最初の四半期に限定しないのは、後に述べる吐蕃王国が分裂した八四二年以降の仮典藏訳事情が不分明であり、或は同年以降に藏訳された可能性も残るからである。同じ禪宗系の偽經とされる藏訳『最妙勝定經』(北京版) 三二卷、八〇五番) は、殆ど新定語に従つて藏訳されており、八一四年前後以降

の藏訳であり、或は後に閑説する九世紀第二の四半期に活躍した法成と同時期の藏訳かもしだれない。

五、『チンカルマ田録』の編纂と破仏

ティックデツェン王は一〇歳で登位し、仏典藏訳事業は驚くほど精力的に進められた。当時の仏教勢力の大きさは、時の宰相の上位に僧職者が位置してゐた事によても、窺うことができる。同王の治世の中期に活躍したとすべき翻訳師に、ルイグンツォン Klu'i rgyal mtshan がいる。彼は律と中觀關係の基本的論書を多数藏訳しており、共訳者達の前後関係からして、イヒシュードとペルツェク dPal rtsegs の中間、より後者に近い時期に翻訳活動を行つたと認められる。また彼等三者は吐蕃の三大翻訳師として、後代のチベットでは並び称されてゐる。

八三六年に至つて、ペルツェクとルイワーンボ Klu'i dbang po 等によつて『チンカルマ田録』(『北京版』一四五巻、五八五一番) が編纂された。同經録は当時の藏訳仏典の一切經目録であり、『大集』中にも仏典題目が一括

して記載されてゐるが、当時それらの仏典が全て藏訳されていたとすべき保証がないと異つてゐる。編纂年に

ついては異説もあるが、現存の同經録本文の記載内容に従う限り、八三六年以前とする事はできない。その後の破仏以降の仏教事情が不明である為、むしろ同年以降で八四八年等である可能性が僅かに残されている。孰れにしても、ペルツェクの活躍時期は九世紀第二の四半期にあつたとすべきである。またルイワーンボは彼の後輩であり、活躍時期も彼に順じて考えるべきであろう。同經録中には七百余の仏典が記載されており、吐蕃期に藏訳された仏典の殆どをそこに見出すことができる。その中にはイエショーデと共に、ルイグンツォンの著作も含まれており、ルイグンツォンがペルツェクの先輩であった事を傍証するかもしだれない。またティソンンデツェン王の著作も一括されているが、その内の現存資料は新定語に従つており、他の諸著作と共に撰述の真偽が検証されねばならない。

同經録中には法成の漢文藏訳仏典も記載されており、別に彼の活躍時期が九世紀第二の四半期を中心とした

する見解と矛盾しない。法成には藏文漢訳仏典もあるが、彼の漢文藏訳仏典は新定語に従つており、敦煌周辺を活動地としながら吐蕃中央の僧官職である「世尊の都僧統」*bcom Idan 'das kyi ring lugs* を称し、吐蕃中央と敦煌が密接な関係にあった事を窺わせる。

ティックデツヨン王が没すると、弟のティウイドゥムテン *Khri 'u'i dum brtan 王*(八〇九一八四)が登位し、彼こそ以後百五〇年間の仏教暗黒時代を導いた破仏の王として、後世のチベットに著名なラン=ダルマ *Glang Dar ma* である。同王はハルン=ペルギドジ *H Ha lung dPal gyi rdo rje* に殺害されたと伝承され、以後の吐蕃王国はコムト_ノ *Yum brtan* (八四三)~一八七八)と「ティ」ウーベン「シモン」[Khri] 'od srung [brtsan] (八四三一九〇五)に分割統治され、諸氏族の離反と抗争によって分裂と混亂の時代となつた。しかしラン=ダルマ王と共にウースンの願文も敦煌資料(Pt. No. 134; Pt. No. 131, 230, 999; St. No. 40)中にあり、当時の仏教事情が今後解明されねばならない。

伝承によれば『デンカルマ田録』編纂の後に、現存し

ない『チンパマ田録』と『パンタンマ田録』が順次編纂されたという。しかし後代に言及された記載内容を見るに、『チンパマ田録』は『デンカルマ田録』以前に成立したとすべきであり、或は『大集』編纂の前後の成立かもしれない。一方『パンタンマ田録』は、同じく後代に言及された記載内容を検討すると、チベット撰述の偽作仏典がより多数記載されており、『デンカルマ田録』以後の成立で、吐蕃王国の分裂後の成立とすべきかもしぬ。

『語合』前序の末尾には、タントラ經典の藏訳を制限する事が記述されており、『デンカルマ田録』に記載されるタントラ仏典は一三に過ぎない。一方『デンカルマ田録』に記載されていない『秘密集会』(『北京版』三巻、八一編)の敦煌本(St. No. 438)があり、同資料の訳文は藏經本に近似し、新定語に従つてある。同資料の藏訳者をペルジョク等とする後代の伝承もあり、吐蕃王国の分裂後の藏訳である可能性を十分に考慮せねばならない。さらに密教關係の敦煌藏文資料には、新定語に従つた藏訳仏典と共に、従つていない藏訳仏典が含まれている。

特に後者には新定語以前の訳語が使用されている例や、梵音の転写が『語合』とは異った基準でなされている例があり、藏訳時期と場所の決定には慎重でなければならぬ。即ちそれ等の資料の中に漢文藏訳の密教仏典が含まれる可能性、或は吐蕃王国の分裂後には新定語の規制そのものが乱れた可能性を考慮するならば、時期や場所を決定すべき明確な基準を現時点で示すことができないからである。

藏經本『法王經』系統とは異訳の敦煌本『法王經』(Pt. No. 2105)があり、藏訳者は都僧録の法海と讃解されており、都僧録の出現は帰義軍張氏の時期(八四八一九一四頃)とされている。同資料では新定語以前の訳語と共に、それらとも新定語とも異なる訳語が用いられてゐる。また漢文偽經の藏訳『天地八陽神呪經』の敦煌本は三系統に分類されており、その一是新定語以前の訳語を使用し、その二是新定語を使用し、その三是前記両者の訳語とそれ以外の訳語を混用している。後代の伝承によると、同經はコーラン語から藏訳され、『ベンタンマ田録』に記載されていたとするが、『デンカルマ田録』

【補注】吐蕃佛教史については山口瑞鳳「チベット仏教」、『(講座)東洋思想』五、東京大学出版会、一九六七、特に

同『吐蕃王国仏教史年代考』、『成田山仏教研究所紀要』(『成田紀要』)三、一九七八など参照。吐蕃の訳經史については拙稿「吐蕃訳經史」、『講座敦煌6』敦煌胡語文獻(東京、大東出版(未刊))など参照。また『ベショー』については川越英真「rBa bshed の一考察」、『論集』五、東北印度学宗教学会、一九七八など参照。吐蕃佛教の諸伝承の実例は稻葉正就・佐藤長訳『フウラン・テブテル』京都、法藏館、一九六四など参照。さらに吐蕃王国の歴史一般については佐藤長『古代チベット史研究』東洋史研究叢刊五一・二、京都、東洋史研究会、一九五八・九の外、山口瑞鳳氏に多数の研究があり、参照されたい。

一、仏教伝来と仏寺の建立 ヘトドリヤツヨン王について

